年男

# 「みようみまね」だから繋がる

今では購入することが当たり前となった「しめかざり」ですが、昔はその家の家長（父・祖父・息子など）が作っていました。家長は正月が近づくと「年男」と呼ばれ、しめかざりの製作や松迎え、すす払いなどさまざまな正月準備を担います。それらのしきたりは家長から次の家長へ、代々受け継がれていくのですが、私が作り手への取材をしていく中で、大変興味深いことに気づきました。取材対象者のほとんどが「ちゃんと教えてもらったことはない。みようみまねだ」と言うのです。そこで思いました。「みようみまね」は、物事が継承されていく魔法の言葉なのだと。つまり、1ミリもスキのない設計図を渡されたら思考停止になってしまいますが、曖昧ならば試行錯誤する過程でそれが「自分ごと」になっていきます。より良くしようとワクワクしたり、苦悩したり、それが楽しい。ここでは、「みようみまね」の魔法にかかった30～50代の若い年男を取り上げます。

## 初代年男

東京都町田市・江川英明さん（50 歳）

江川くんは私の美大時代の同級生で、現在はデザイン会社の代表取締役。在学中はクラスが違うこともあり接点が少なかったのですが、こと数年、SNS に流れてくる江川くん「自作」のしめかざりに驚き、緊急取材となりました（笑）。

### ◉農業祭とお父さんと絵本

江川くんは毎年、地元・町田市で開催される農業祭の「輪飾り講座」を楽しみにしていました。300 円（当時）で輪飾りを 1 つ作ることができ、江川くんは2つ作って家に飾っていたそうです。「そういえば、子どもの頃は父親がしめかざりを作っていたな」と思い出すことはありましたが、作り方を覚えていたわけではありませんでした。そんな中、嬉しいことに私の著書『しめかざり』が多少の起爆剤となり、「自作してみよう」という気持ちが湧き上がってきたそうです。

### ◉身近な人たちとともに

そうなったら江川くんは早い。お子さんが通う高校では年に一度、親が中心となっておこなう「手作り講習会」という行事があるので、そこで「しめかざり作り」を提案したのです。ワラの入手は実家が農家だという PTA のかたにお願いしました。

そして、ワラのすぐり方、縄の綯いかた、紙垂の切り方まで、動画サイトを何十本も観て学びました。インターネットは誰かのおじいさん、おばあさんを、自分の師匠にすることができます。もちろん、直接会って学べばさらに深く習得できると思いますが、現代社会では身近に師匠がいないことがほとんど。動画を食い入るように観ていたであろう江川くんを想像して、その創作意欲と行動力に脱帽しました。

そして満を持してやってきた講習会当日、江川くんが講師となり、無事に全員が「しめかざり」を完成させました。インテリア小物を作るのが得意だという PTA のお母さんにお願いして装飾を作ってもらい、皆で楽しく付けたそうです。江川くんは完成したしめかざりを自宅に飾ったり、親戚にも贈りました。そして残ったワラは会社に持参し、「会社用」のしめかざりを作ったそうです。突然縄を綯い始めた社長に、社員は興味がありつつも遠まき気味だったようで…。

### ◉誰かの喜び、 自分の楽しみ

PTA の講座後は、「今年はいつ作るの?」と待ち遠しそうに聞かれたり、親戚に贈ったしめかざりが喜ばれたり、家や会社でも大切に飾ってもらえたりと、「まわりに喜んでもらえるのがモチベーション」と江川くんは言います。続けて「次回はもっといいものが作れそう…という気持ちが、年末まで 1 年かけて熟成されてしまうんだよね。」とも。「熟成って!（笑）」と心の中でツッコんでしまいましたが、そんな楽しい気持ちが素直なしめかざりを作るのだと思います。

親に教わらなくても、師匠がいなくても、誰でも初代「年男」になれます（江川くんがそれを望んでいるかどうかは別にして）。もちろん、女性でも、若くても、独身でも、誰でも。自分の家の文化ですから、自分で生み出せば一番フィットしたかたちになるはずです。

左写真2枚:
PTAのみなさんとの講習会の様子と江川くんが作ったしめかざり

右写真2枚:
会社用に作った
メガネ型とゴボウジメ
＊写真は全て江川さん提供

## 遠距離の年男

岡山県苫田郡・三村宜敬さん（38 歳）

三村さんは現在、仕事も住まいも千葉県に移しているため、正月の「しめかざり」は、年末に岡山の実家へ帰って製作しています。私はその「遠距離の年男」という状況に興味が沸きました。今回は諸事情で年末に三村さんの実家へ伺うことができませんでしたが、2020 年2月 2 日に千葉県で製作実演とインタビューをおこないました。以下、三村さんの言葉で構成します。

### ◉じいさんを思い出しながら

「小さい頃は、『じいさん、年末になると何かやってるな』としか思っていなかったのですが、私がじいさんの背を越えたくらいから、『お前、（お飾り）を神棚に置いてくれ』と言われるようになりました。それで自分も、あぁお飾りか、と認識し始めて。中学か高校の頃には一緒に作っていましたね。じいさんは『お前やれ』という人ではなかったので、土間で隣に座って、横目で見ながらなんとなく作っていました。

あるとき、年末近くにじいさんが倒れて、お飾りを作れなくなったんです。オヤジはやらないっていうから、私が作るしかなかった。それまで一緒に作っていたのに、いざ一人でとなると『あれ? ここは三つ編みだっけ? 左縄だっけ?』と、わからないことばかり。しまいには昔のアルバムから正月の写真を探して確認しようとしたのですが、写りが小さくてよくわかりませんでした。結局いまでも毎年、『じいさんはどうしてたのかなぁ』と思いながら作っています。」

### ◉「お日待ち」 のたゆうさんの言葉

「うちでは 1 月 8 日頃に『お日待ち』という風習があります。神社から『たゆうさん』という宮司さんがお越しになり、神棚に玉串を供えて清めてくれるのです。そのとき、床の間に私が作ったお飾りがあると、『ここのは見事!』と言ってくださる。それは私も嬉しいし、親も喜んでいる。だから正月が過ぎても、『お日待ち』まではしめかざりを外さずに飾っておくのです。

でも一度、夏に帰省したらまだ飾ってあって、『（どんどで）焼かなかったんか』と聞いたら『あまりにも、たゆうさんが褒めてくれるから残しておいた』と。さすがにそれは、早くお炊き上げしてくれ（笑）と思いましたね。ちなみにこちらの地域では、どんどで焼いたお飾りの炭を顔に塗ると風邪をひかないという風習があって、私も子どもの頃はやってましたよ。」

### ◉改善の日々

「個人的には毎年『改善』しています。この前垂れみたいなお飾りは、ワラの挿し方を変えたらきれいに藁しべが垂れるようになりました。じいさんが生きていた頃に作り方を聞いてみたこともあるのですが、『ええころにすりゃええ』としか言ってくれませんでした。

いまは、私が年末に実家へ帰れない時でも、ワラを千葉に送ってもらって作っています。うちのお飾りは売っていないですからね。」

三村さんは終始ニコニコと楽しそうにお話しをしてくださるので、本当に家族が好きで、家族の喜ぶ顔のために作っているのだと伝わってきます。そして、たゆうさんやご近所さんへ、きちんとしたものをお見せしたいという「誇り」も感じます。

「遠距離」というハードルを軽々と飛び越える「年男」でした。

三村さんの
製作風景の動画
を会場で流してい
ます。ぜひご覧く
ださい。

＊冒頭の写真は 1995 年のどんど焼き。
三村さんも顔に炭を塗っています。

## 3世代家族の年男

宮城県栗原市・二階堂旭さん（39 歳）

息子さんもお手伝い

去年のものを見ながら…

2019 年 12 月 29 日。取材のため二階堂家へお邪魔しました。二階堂家は 3 世代 7 人家族です（写真ではお姉さんが帰省していて 8 人）。旭さんが毎年、「だなどの」として家中のしめかざりを作ります。二階堂家では年男のことを、「だなどの」と呼ぶのです。

### ◉仏教とつながるしめかざり

二階堂さんが作るしめかざりは「三宝様」という名称で、ダイコンジメ風の大きなしめかざりに、3 色の御幣を立てます。通常は釜神に祀るそうですが、二階堂家では昔から釜神はなく、いつも台所の上部に祀っていました。

興味深いのは、「三宝様」はこの近辺の日蓮宗の檀家さんのみに伝わる風習だということ。年末になると近くのお寺から「青・赤・黄」の 3 色を重ねた御幣が配られ、それを自作の「三宝様」に立てます。3 色の意味は「水（青）と土（黄）で火（赤）を挟む」、つまり火伏せです。しめかざりなのに仏教？と思うかもしれませんが、しめなわ・しめかざりは宗教ではなく習俗です。お墓にしめかざりを掛ける風習も各地でみられます。二階堂さん自身も、疑問に思ったことがないと言っていました。

### ◉母から継承

次に私が大変興味を持ったのは、二階堂さんが「母」から三宝様を継承したことです。昔は「年男」といえば、父や祖父など家長（男性）のことでした。しかし二階堂家では祖父が亡くなる一年前、もともと手仕事が好きだった母が継承を「志願」したのです。

それから数年後、今度は旭さんが引き継ぐことになりました。しかし、母から手取り足取り教わったわけではなく、自分が幼い頃、祖父の手伝い（藁を持つ係など）をしていた時の記憶を引き出しながら、試行錯誤で作っているとのこと。また、三宝様づくりは年に一度のことなので、毎回「去年はどうしてたかな？」と思うそうです。昨年自分が作った「三宝様」を傍らに置き、参考にしながら作業する姿が印象的でした。「全体のバランスはいつも気にしています。根元を太くするとドッシリ感が出て良いなと思えば、そのように改良したり。でも何が正解かわからないです。自己満足の世界ですから（笑）」

### ◉家族の中で作る

旭さんの作業中は、子どもたちがお手伝いをしたり、ちょっかいを出したり、とても賑やか。しかし完成すると、「母親が毎年、出来上がった三宝様のクオリティーにコメントしてくるんですよ…」と苦笑い。そこへ母登場で「今年はあんまり太くないんじゃない？」とサラリ。旭さんも「ほらきた！ご意見番！」。

二階堂家では「三宝様」を中心に家族が集まり、「正月」の空気が流れ始めます。「これを作らないと一年が終わらないし、始まらない」。そう言って旭さんは、三宝様を台所の高いところへ丁寧に祀りました。

二階堂さん製作の三宝様（2019 年）

2012 年の三宝様。
まだ作り始めの頃。
＊左写真と実際の集合写真は
二階堂さん提供

◀ 以下の写真は三村さんのもの

床の間の奥

床の間の手前

釜土大神様

水神様

納屋

地主様

玄関

三村さんが製作するのは
下記5種、計16個。

1. 床の間の奥
2. 床の間の手前
3. 神棚、水神様、地主様
   氏神様など計12個
4. 納屋
5. 玄関

＊実際の設置写真とそこに飾るお写真は三村さん提供

二階堂さんの
「三宝様」製作風
景の動画を会場で
流しています。ぜ
ひご覧ください。